

今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』（汲古書院刊、2006年）を読む（上）

木山 英雄

橋川時雄という先学は、その学においてまずわたしの関心外にあったというほかはないけれど、ごくささやかな縁はあった。学生のころ、竹内好の『魯迅』や武田泰淳の『司馬遷』と同じ叢書（東洋思想叢書、日本評論社）で橋川著『楚辞』を読むだけは読んだものの、訓読書き下しを採らぬところは漢文先生らしくなかったし、ありきたりの「南北」論とは意識的に区別する独自の「華夷」「文筆」の辨による楚辞の性格づけは今読んでも面白いのに、その大構想を「しかるに今日は殷周交代以来の大変動が支那大陸にも波及してきた、四千年を経て遭遇した夷系回復の大変動とも見られる、東方よりする日本の道義勢力が働きかけて、あくまで華系今は英米夷狄の物力に取組もうとする輩たちをして、華夷両系を界断する対角線上の一隅に追ひまくった」と現在化する、この本の中ではむしろ異例な気焰に、のっけからつまずいてしまったらしい。子供なりに屈折した敗戦の後先の記憶を抱えて読む戦争末期の著作だけに、単純な感覚的反応を越えるためには、相応の知識が必要だったのだろう。わたしは、古本屋へ売りにゆく本の中にこの一冊を入れたことまで覚えているが、その後も、戦後の中国学界に目立つことのなかったこの学者の人とも書き物とも、没交渉に過ぎた。そんな人に手紙を書いてわざわざ訪ねることになったのは、今しがた出てきた、「御手紙拝見、いつでも在宅いたして居りますから」云々とある丁寧な返書の消印によれば、1975年（昭和50）7月、中国では文化大革命もようやく終わりかけていたころである。当時わたしは、周作人の問題の一件に関して、占領下北京を知る人を芋づる式に訪ねては聞書きを取っていたとこ

ろで、松枝茂夫先生に紹介されて、なんのことはない荻窪の松枝邸の隣に住まわれる橋川老先生に、おそれながら採訪を願い出たのであった。老先生には、傀儡政権への周引き出し工作に直接かわる質問事項を用意して臨んだが、三十年近くも北京に根をおろし、問題の時期にも北京の文教界に深く関与し続けた人の話には、さすがに期待にそむかぬ確かな手応えがあった。淡々となんでも話してくれる感じも爽やかだった。

如上の次第ゆえ、小文も相応の関心と無関心との偏りを免れがたいが、わたし自身の加齢の結果が、疎隔をすこしは緩和する方向に作用していれば、幸いだ。

その著『楚辞』一冊だけではわたしに通じなかった、橋川時雄という中国学者の特異なところが、まさに五四運動から日中戦争の全期間にわたる激動の時代を北京ですごし、その間数えきれぬほどの学者や文人と、とにもかくにも学術・文化上の交渉の糸を繋ぎとめ、戦争の最後の瞬間までその場をもちこたえた経歴にあるのは、事実だろう。それをくわしく承知するためには、本書の全部を熟読するに如くことはないが、まずその経歴のあらましを、自身の不勉強の反省も兼ね、雑駁ながら日本人の中国留学一般との関連において一瞥しておきたいと思う（以下、橋川以外の学者の経歴等は、特に出典を示さぬ場合、主として東方学会編『東方学回想』Ⅰ～Ⅹによる）。

特異な経歴は、福井の農家の次男に生まれ、師範学校在学中に漢学に熱中しだした青年が、すでに日清（1897）日露（1904）の両戦役を経て、当の中国も口語文学を旗印とする文学革命に沸き立っていた1918年（大正7、民国7、橋川24才）と

いう時点で、「早く中国にいて、中国人たちと同じ気持ちで漢文が書けるようになりたいものだと、居ても立っても居れなくなって」と後に回想するような、いささか時節はずれな動機から、小学教員の職を棄てて渡中を決行したことに始まる。しかし、たまたま、東京で高等師範を出て付属中教員を十年勤め上げた後、橋川より一年遅れて同じく私的な留学に出た諸橋轍次も、「支那の学者はだんだん少なくなっている。早く行かないと清朝の旧学者にも逢われないかとの心配」に急かされて決心したと述べているように、時節はずれというなら、海外に学問を求めるという通常の意味で中国留学を思うこと自体がそうだったのだろう。しかも表向き政治に無関心な漢文学学徒の留学の夢に、大陸へのまさに時代的な関心がどこかで重なっていなかったはずもない。

わたしのあやふやな知識では、橋川や諸橋よりも早く、留学といえばまず欧米留学を指した明治開化主義のもとで、国立大学を通じて正式に中国留学が行われたのは、1899年（明治32、光緒25）服部宇之吉が東京帝大文科大学専任教授になると同時に、漢学研究のため満四年間、但し内二年は教授法および研究法研究のためドイツへという条件で、翌1900年には文科大学大学院学生狩野直喜が、それぞれ文部省から清国に派遣されたのが最初のものである。教授法と研究法はドイツで、というところがミソで、日清戦争以後とみに声威の落ちた清国はせいぜい調査や視察の対象にすぎなかったわけである。ところでこの二人の留学は、ともに1900年の「北清事件」（義和団）に巻き込まれ、「北京籠城」のほうで有名になってしまった。服部の『北京籠城日記』が掲げる民間人「義勇隊」33人の名簿中に「文部省留学生」の肩書きは服部、狩野の両名、ほかにただ「留学生」とある二人の姓名からはその性格はわからない。熊本の済々黉を狩野より三年ほど先に卒業し、一高中退後独学で『支那文学史』（1897）を出した古城

貞吉の名もあるが、これは「日報社」（後の大坂毎日新聞社）の従軍記者として来ていた。同じころの例で、1899年秋に萬朝報記者の身分で北清と長江地方へ初めての旅行をした内藤虎次郎（湖南）の紀行「禹域鴻爪記」（『燕山楚水』1900）に見える、在清日本人のうち「留学生」と名のつくのは、横浜正金銀行、三井物産などの企業や農商務省といった官庁がそれぞれに持っていた施設ないし方法で研修中の者ばかりである（あとは当時「学堂」と呼ばれた各地のさまざまな新式学校の日本人教習たちや本願寺の布教を兼ねた日本語学校で教える僧侶など）。1901年には、朝野を挙げての大陸進出機運を現地での学校経営という理想に反映して、上海同文書院が設立され、初代院長根津一が日本から公費生51人、私費生18人を引率して開院式に臨むというような動きもあり（安藤彦太郎『中国語と近代日本』）、さらにつづく満鉄（南滿州鉄道株式会社、1906）創立以下、中国固有の伝統的学問以外の関心にもとづく現地研修の場は商、軍、官等の各界にわたって急増しつつあっただろう。

そのような段階から橋川の渡中まで、まだかなりの時間があるが、橋川や諸橋には高嶺の花とでも映ったであろう、1906年（明治39）の、東京帝大文科大学助教授塩谷温の留学について、こんなエピソードがある。塩谷は、宇野哲人とともに、服部宇之吉の場合と同じく清国・ドイツあわせて四年間の留学を命ぜられたが、総長の浜尾新から、「勿論支那には学校もなく学者も居ない。一草一木を師と思って勉強してお出なさい」云々と諭されて出かけたところ、はたして北京には「行くべき大学もなく、従ふべき先生もなかった」。そのあげくに彼は湖南僧学堂で教習をしていた水野梅暁のすすめで、長沙の葉徳耀に個人的に師事することになり、後にこれを「明治の初期に植原陳成が杭州に兪曲園に従ひ、宮島大八が武昌に張濂亭に従った当時の遊学は、全く中国人同様の入門で

あったが、中期以後の服部、狩野両博士は、見学に過ぎなかった」というふうに自負する（塩谷『天馬行空』1956）。ここで引き合いに出された榎原陳政（成は誤記）は、上記「北京籠城」の際の負傷がもとで死んだ、当時の日本公使館二等書記官。かつて大蔵省印刷局で製版の見習い中、成績拔群につき「漢学専門研習」を命ぜられ、まず清国公使館に内地留学といった形で、初代公使何如璋や参贊官黄遵憲らに就いて四年間「學術并ビニ語言」を修めた後、1882年（明治15）何如璋の帰国に随行して渡中、三年にわたり各地を巡遊視察して帰国、『禹域通纂』二卷（大蔵省、1888）を出した。杭州（のたぶん詒経精舎）で俞樾に師事したのはその間の約一年、自ら「昼夜研習専ラ學術ヲ治メ交友ヲ広クシ位置ヲ高尚ニシ受益最モ博シ」と回顧する（『禹域通纂』巻首「留学略記」）。宮島大八（詠士）は1886年（明治19）東京外国語学校の清国語科学生だった時、魯、清、韓語の三学科が東京商業学校に吸収された（英、独、仏は大学予備門に）のを不満として、魯語科の長谷川辰之助（二葉亭）といっしょに学校を飛び出し、翌年、直隸省保亭の名門蓮池書院に留学、「曾（国藩）門四学士」の一人として桐城派古文や書法に名の有った、時の院長張裕釗に師事すること七年、帰国して今に続く私塾善隣書院を開き、新東京外語学校清語科の初代主任も勤めた。父誠一郎（栗香）は米沢藩で国事に奔走の後、明治に入り貴族院議員となったが、これも清国公使館に出入りして黄遵憲を感服させた漢詩の上手で、大八の歴とした士人教育機関への本格的入門には、この父の紹介と本人の強い意志がものを言ったと伝えられる（陳捷『明治前期日中学術交流の研究』、安藤上掲書）。俞樾と張裕釗にはほかにも日本人の門弟がいたといわれ、わたしはその詳しいところを確かめてはいないけれど、いずれにせよ、榎原陳政や宮島大八の例から、元高崎藩主大河内輝声以下、清国公使館員との筆談に熱中した人々の

例（実藤恵秀編訳『大河内文書—明治日中文化人の交遊』、陳上掲書）が語るような、大陸文化への憧れないしは尊敬の上に、公私の留学を通じて、大陸事情調査や言語教育の新しい道の拓かれだした時代を読み取ることができるだろう。もっと早くは、外務省が必要に迫られて霞ヶ関に魯語学所と並び設けた漢語学所で、唐通事が教えそれを習うのも唐通事の子弟というのが、明治4、5年頃の状態だったが、同9年、文部省に交渉し旧外国語学校から三人の学生を「通辯見習」に選んで北京へ派遣したのが「官辺に於ける北京語尊重の始であり且つ北京留学生派遣の嚆矢」だろうという（何震三『北京官話文法』1929）。

しかし塩谷の自負は、近代的な学制の下で留学しても中国には学ぶべき近代を見いだせなかった焦りが、前近代の美風で救われたというだけの話ではない。というのは「何しろ支那文学の新生面を開拓せん為に戯曲小説の研究に専念して居った」塩谷が「伝家の業」たる経史の学からの逸脱を周囲からたしなめられながら葉徳耀に習おうとした詞曲の学には、漢文学が大学の文学学科に適應するための近代化の一選択としての意味がかけられていたから。つまり、士大夫の学としての漢文学のなかへ国民主義的な文学史観によって俗文学を引きいれようというので、それを彼は続くドイツ留学で理論的に補強し、さらに彼が葉に師事していた年に『曲録』や『宋元戯曲史』を完成させていた王国維の先蹤に導かれ、学位論文の元曲研究を完成させた（1920、大正9）のだった。

戯曲小説という「新生面」は、すでに狩野直喜も経史第一の信条の下にではあれ充分な関心を注いでいたが、旧漢文学からの脱却のもう一つの道である厳格な文献批判の学（フィロロギイ）としての清朝一代の考証学の消化吸收こそ、狩野が京都帝大文科大学における新「支那学」の存立をかけて意欲的に推進したことだった（狩野『支那学文藪』1927）。狩野の留学経験じたいは、北京籠

城の後、出直して上海へ渡った際は西人の中国学（シノロジイ＝支那学）に関心を集中し、さらにその基礎のうえに1912年（明治45＝大正 1）の欧州留学が続くが、留学に代わる経験として、辛亥革命後に日本へ亡命し、京都に移り住んだ羅振玉や王国維らとの直接交流があった。こうして、京都支那学の次世代を代表し、「中国人と同じ考え方、中国人と同じ感じ方で中国を理解する」（吉川幸次郎「留学まで——質問に答えて」全集22）ことをモットーに、1928年（昭和 3）中国留学に出た倉石武四郎（文部省派遣）や吉川幸次郎（上野奨学金）は、事前に羅・王や董康らの来日学者との応接に慣れていたうえに、北京では橋川にも大いに助けられて、存分に留学効果を享受することになる。

日本人中国留学史の束の間の全盛期を象徴するとさえいえそうな、彼らの遊学三昧ぶりは、倉石が当時話題になっていた李慈銘の『越縕堂日記』に触発されて書いたという、留学第三年（1930、昭和 5）正月から 8 月帰国までの漢文日記『述学齋日記』（本邦未刊。栄新江、朱玉麟輯注『倉石武四郎中国留学記』中華書局、2002）に、夫子らしい透明さでみっちり記録されている。彼は、橋川と懇意な音韻学者孫人和の邸宅に寄宿して常住その指導を受け、橋川の個人雑誌『文字同盟』誌上の広告で知った楊鍾義の私塾石橋講舎に吉川と通い、北京師範大学では錢玄同の講義を聴講し、さらにわたしは初めて知ったが、毎週漱石の『坊っちゃん』を漢訳しては兪平伯宅へ持参し、白話文の手ほどきまで受けていた。そういう定期的な勉強の合間には、夥しい古書の購入や日中の多彩な学人との交流の記事が詰まり、最後は神戸港でかれを中国人と間違えた税関職員の差別的な態度に対する憤慨で終わる。

一方の橋川は、後に「私にヘンテコながら中国文学というものに対するモノの考えかたがあるとするなら……倉石武四郎・吉川幸次郎や古城貞

吉・長沢規矩也たちと親しく相語ったことから、強い示唆を受けて、私なりに固まりかけた」云々と述懐していて、かれの留学の成果もまた、ようやくその頃、確かな学問的手応えの自覚に達したようである。

そこまでに至る橋川の遊学生活に少しふれておく。かれは師範の先輩の紹介で、渡中に際し、すでに京都帝大文科大学教授におさまっていた内藤虎次郎を訪ね、「今学校にゆくところだ。……師範出には往々馬鹿なヤツがいる、君もしんみりと勉強したらモノになろう」の一言に、同じく師範出の人の言葉だけに大いに励まされたと、本書中にも再三繰り返し回想しているが、そういう勉強のさしあたっての目的でも手段でもあったのが、彼が本場で磨きをかけたいと願った、漢文の読み書き能力だった。そもそも彼が中国で最初に頼ったのは、父親の友人の当時大連で漢字新聞『泰東日報』を主宰していた金子平吉（雪齋）という人物で、彼が1922年（大正11）北京の漢字新聞『順天時報』に入社できたのも、もとをいえば金子の紹介による。内藤にも『萬朝報』以前に『台湾日報』主筆となってもっぱら漢文で論説を書いた経験があり、『燕山楚水』に引かれる嚴復や文廷式への筆談インタビューなども併せて、漢文ジャーナリズムともいうべき分野の栄えた時代とその局面をしのばせる。『順天時報』への入社は橋川の最初からの希望だったが、その時は社長の渡辺哲信に「うちでは、ふるい型の漢学をやる人には来てもらうわけにはいかない、中国の事情は変わってきたのです」と断られ、北京大学の聴講や共同通信社の翻訳記者その他のアルバイトなどで相応の経験を積み、梁啓超『清代學術概論』や胡適『晩近の支那文学』（原題『近五十年的中国文学』）の翻訳を出す（ともに東京、東華社1923。さらに魯迅『中国小説史略』も訳す予定だった）までに視野のひろがったところで、それがかなったのであった。

人も知る橋川の中国の学者文人との広く深い交流の基礎は、『順天時報』で、名高い演劇通の辻武雄（聴花）の下で学芸記者を勤めた時いらい徐々に培われたのだそうであるが、彼が1927年（昭和2）に同社を辞し、その退職金を頼りに漢・和文二本立ての個人雑誌『文字同盟』（1927-31）の発刊に踏み切ったのは、そうした漢文ジャーナリズムの経験をこころゆくまで学芸に仕えさせ、みずからもその世界に生きるためだった。その世界に生きるというのは、長衫を着たり詩文の応酬を無難にこなしたりするだけではなく、学問の成果をもその世界の最も洗練された文体によって示すべく志すことで、そのようなレベルで「中国人になりきる」ための本気な精進におおらかな信用を以て応えるところに、その世界の中華的普遍主義があったのであろう。そんな関係は漢字文化圏の学問に当初から埋め込まれていた理想でも宿命でもあり、さらには京都支那学が近代主義的な方法によって追及したところでもあったかもしれぬが、それを身柄ごと現地に投じて実践した点で橋川ほど徹底した例はほかにないのではなかろうか。と、まずは溜め息半分にこんなことを考えさせられるのだが、一方で、事はそんながさつな言葉で論じきれそうにない気もする。それは、中国学者として彼が最も尊敬し、かつ後述の一大事業のうえで実際にも立ち入った関係を持つことになる狩野直喜や、彼の終生かわらぬ陶淵明心酔、さては小文の冒頭に言及した『楚辞』の「華夷」「文筆」の辨などまで併せて「しんみり」考えるべきかもしれない。さてとにかく、王国維の入水自殺や葉德耀の北伐革命軍による処刑というような事件に彩られる時代の旧学を主とする学者の世界に寄り添い、しかも終刊号には橋川自身の学問的代表作をも附刊する（第5年4・5・6号合刊附刊『陶集版本源流攷』）雑誌『文字同盟』の全容は、本書に先立って刊行された、今村与志雄編『文字同盟』全三卷（汲古書院、1990-91）

の、後になるほど単発的な附刊の方が主になる全号の影印と編者の至れり尽くせりな解題、年表等に余すところなく示されている。橋川にとって最も充実した幸福な時期の所産に違いないその雑誌の影印を承けて、いわばかれの別集と行実資料集を兼ね、さらに遺族を挙げての記念出版の趣も加わったのが、実は本書であって、両書を通じる編者の今村与志雄は橋川の女婿に当たる。しかし、岳父の生涯と遺業を学術的歴史的な客観性ととともに伝えようとする、編者の注や年表は本書において却って批評的な克明さを増す感があり、逆に、影印本『文字同盟』第一巻巻頭には次のような愛情の言葉があった。

「江戸時代の儒者が、そのまま時空を超越して、清朝時代の人情風俗の面影をとどめている……古都北京に住んだなら、こういう記録をのこしたであろう、橋川時雄の『文字同盟』の漢文で書かれた編集後記……は、読むものにそういった一種のアナクロニズム的魅力を感じさせる」「……困難な境遇にあった清朝の旗人たちに見られる没落する階級・身分の人々にみとめられる礼儀正しさ、気品といったものの夕映えの美しさに心動かされていたようである」（「刊行のことば——序に代えて」）。

このような言葉を特にここに引いた理由は、確かにそんな風韻に事欠かぬ橋川の夢のような学事三昧にそのまま日本帝国の国策事業が乗っかってきて、彼みずから「吏と儒を兼ねる」（「自甘勞苦吏儒兼」本人による訓み「自ら甘んず 勞苦吏儒を兼ねるを」）と詩に詠うような、もはや留学問題とは別な事態に、本書の内容はより多くかわるからである。（待続）